この世界の何処にもネバーランドなんてない

宮崎三樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この世界の何処にもネバーランドなんてない

【Ｎコード】
Ｎ９５６６Ｚ

【作者名】
宮崎三樹

【あらすじ】
本を読み、手首を切る。
そんな砂漠のような日々。
砂漠で死んだ二人の中学生の物語。

prologue

青春なんて馬鹿みたい。

血が床に滴り落ちる。

血はフローリングの床の、少し前までピアノがあったところに小さな赤い水たまりを作り、私はカッターナイフの刃をティッシュでふいて、手首の傷を止血した。

度重なるリストカットのおかげで、止血がとても上手くなっていた。

動脈を指で押さえ、心臓よりも高い位置に手首を持ってくる。

これだけは、私がリストカットをするおかげで父が喜ぶ点かもしれない。

医者である父は、私を医学部に進学させて、診療所を継がせたいらしかった。

父親は医者として有能なのはわかるけれど、完璧なまでの合理主義者で、小説というものを無駄だと言って、それを読んでいる私を馬鹿にするつまらない人だった。

幼いころは、私がピアノで新しい曲を弾けるようになる度に喜んでくれたけれど、小学5年生のときに私に中学受験を強制してからは変わってしまった。

幼く、父や先生の言うことをハイ、ハイとよく聞くいい子だった私は、医者になることを夢だと言い、父に言われるままに中学受験をし、つくば市にある私立の中高一貫校に入れられてしまったのだった。

私立と言っても、学習院とか慶応みたいな、大企業の社長令嬢みたいのがたくさんいる学校ではない。茨城の地方都市の、少しばかり生活に余裕のある人々の娘や息子が通う学校。

その学校に入ったのは失敗だった。

なんだかその学校には、嘘の空気がただよっているようだった。

先生の微笑も、クラスメイトの友情も、みんな嘘。
それらが、見かけだけの、軽薄な、心の伴わないものだと、なぜかそういったことに敏感な私には思えた。
「あたしたち、友達だよね」
友達だと確認しなければいけない友情なんて友情じゃない。
こういうの、人間不信っていうんだろうな。
昼休みの教室で聞こえるのは、下劣な話しかしない男子の下品な笑い声。ひたすら流行を追いかけている女子の甲高い笑い声。いずれも価値のない、ただのノイズ。
だから私は中学校に入って2年間、ずっと誰とも必要最小限の会話しかしなかった。
そのせいで通知表には、もっと人と話しましょう。と書かれる始末だった。
青春なんて馬鹿みたい。
青春なんて、人生に疲れてセンチメンタルになった大人の感傷でしかないんだ。
8年前に亡くなった母が始めさせてくれて、唯一の楽しみだったピアノを取り上げられて、勉強とリストカット、それだけの生活。そのどこが麗しき青春の日々なの？
そんな誰も答えてくれない問いを、心のなかで繰り返しながら、床にたまった血をふき取っていた。
貧血で頭がくらくらしていた。
貧血とわかっているのに切ってしまう自分が、馬鹿馬鹿しかった。
絶望して切って、切って絶望して、そしてまた切って。その終わりなきループの始まりを、私は詳しく覚えていない。いや、あまりにも嫌な記憶だったがために、忘れたのかもしれない。
たぶん去年の十二月ごろだったと思う。
その時から積み重ねた傷跡は、もう容易には消えない。
人に見られたくなかったから、冬の間は学校指定のセーターで隠していた。

しかし、夏は目と鼻の先まで来ていた。

Prologue（後書き）

年明けに次をアップします。

クリスマスの夜

その日はクリスマスイブだった。
私は英語の宿題をしていた。
机の下の足が寒い。
「かなでーッ」
父親が呼んでいる。
はーい、という返事をして私はノートの上にシャーペンを置いた。
リビングに行くと、明らかにいら立っている父親がいた。
怒っている理由はわかっている。
「奏、この成績はなんだ？」医者である父親は問い詰めた。
「数学は、学年で上位５０位くらいじゃないとまずいんじゃないか。数学ができないと、医学部は絶対無理だ。」
そう言って父親が指し示す私の順位は１００位。
確かに、私の数学の成績は下がってきている。それは火を見るより明らかだった。
もちろん、自分が勉強しなかったのが悪いのだから、まったく反論できない。
怒られるのが嫌だったら、夜遅くまで小説を読むのをやめて、ちゃんと勉強すればいい。簡単なこと。
そう、父親はいつも正しい。
正しいけど間違ってる、気がする。
端的に言えば、私が間違っているのは明らか。
しかし、父親も間違っているんじゃないだろうか。私は医者になんてなりたくないし、医者になるために勉強するなんてもっと嫌だった。
私は父親が軽蔑する文系の歴史、特に世界史が好きだった。医者と歴史学者を比べて、医者の方が偉いという保証はない。（逆も同じだけれど）したがって文系だから蔑まれる。というのはおかしい

ことだと私は思っていた。
私はそれを父親に言ったことがなかった。
人に物を伝える、ということが苦手なのだった。たとえ、それがたった一人の家族であっても。
間違いを指摘できない自分が、悔しい。とても悔しい。

私はうつむいた。
父親の視線を感じる。それは岩のように重く、ナイフのように鋭利だった。
「そうか、だまっているのか……。それなら、奏……ピアノをやめなさい」
「えっ……」
父親は私に死ねと言った。
それと同じことだった。
なら、死んでやる。
私はうつむいたまま、自分の部屋に戻った。
涙が頬をつたっていく。
死んでやる、消えてやる。
これまで、そういう気持ちになったときはピアノを弾いていたのに、父親はそれさえ奪った。
私は、ベッドと机と、ピアノしかない地味な部屋のドアを思いっきり大きな音を出して閉め、鍵をかけて、勉強机の引き出しを開けた。
中に入っているのは黄色のカッターナイフ。
カチカチと音をさせて刃を出す。
それを頚動脈に持っていく。
冷酷な刃が首筋に触れる。
冷たい。死の冷たさだ、と思った。
さあ、手を動かせ。そうすれば……死ねる。
手が震えた。

死にたかった。
けれど……
死ぬのは怖かった。
手からカッターナイフが滑り落ちた。
それは床に当たってカツンという硬い音を立て、私の心の弱さを証明した。
私は、数学を理解しようと努力できる我慢強さも、父親に言い返す勇気も、死ぬ度胸さえも持ち合わせてはいなかった。
そう思うこと自体も、言い訳。
この世に神というものが存在するなら、私はそれを呪った。
床に落ちたカッターナイフを拾い上げた。
その刃は、蛍光灯の光を受けて銀色に光っていた。
カッターナイフを白い左手首に押し当て、切り裂いた。
鋭い痛みともに、鮮やかな紅の血が流れる。
流れた血の分だけ心が軽くなった気がした。
私はその時点では、それが悪夢のはじまりであることを知らなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9566z/

この世界の何処にもネバーランドなんてない

2012年1月6日23時48分発行